

長岡市長記者会見要旨

日 時：令和5年6月30日（金）午前10時から

会 場：アオーレ長岡 東棟4階 大会議室

【会見項目1：産学官の総がかりで挑む人材育成と産業振興 「米百俵プレイス ミライエ長岡」西館オープン】

（市長）

7月22日に「米百俵プレイス ミライエ長岡」西館がオープンします。このオープンに関連した情報を整理し、皆様に提供したいと思います。

大手通坂之上町地区で整備が進められてきた「米百俵プレイス ミライエ長岡」の建設地は、米百俵の故事で知られる国漢学校がかつて建っていた場所であり、長岡の原点とも言える歴史的な場所です。また、野本恭八郎が作った互尊文庫という米百俵の精神に連なる施設も入ります。ミライエ長岡は、互尊文庫を中心とした学びの場や、NaDeC BASEを中心とした産業振興・人材育成の場、市民の皆様が集まって楽しんだり議論したりするにぎわいの場としての役割を担っていきます。

施設の特徴について説明します。まず、互尊文庫は、新しいスタイルの図書館であり、蔵書数は4万冊です。従来の図書館のような本の分類ではなく、「くらす」「はたらく」「ひらめく」という3つのエリアテーマと15の選書テーマに基づいて本を配置しています。これにより、市民の皆様の興味や課題に合わせて有益な情報を提供し、学びや自己探求、起業・創業などのアクションを促す場となることを目指しています。

次に、NaDeC BASEについてです。現在、ながおか市民センターの地下に構える産業振興・人材育成の活動拠点「NaDeC BASE」を拡張し、ミライエ長岡の5階に新たにオープンします。大学や高専、商工会議所、金融機関などと連携しながら、産学連携や起業・創業、イノベーションの創発などに取り組むフロアです。主な機能ですが、イノベーションサロンでは、利用者同士の交流を後押しするコーディネーターを配置し、新規プロジェクトの創出や起業・創業をバックアップしていきます。こちらはコワーキングスペースとしての機能もあり有料で利用できます。ギャラリーラボは、産学などが共同で行う研究開発拠点です。来館者は最先端の研究開発をそこでも見ることができます。

また、6階には第四北越銀行と共同で整備した貸しオフィス「コラボレーションオフィス」があります。オフィス内に、NTT東日本が長岡市との連携協定に基づき日本海側では初と

なるスマートイノベーションラボを整備したほか、ベンチャー企業などが入居可能なスペース5室を整備しました。また、第四北越ミュージアムも同じフロアに設置されます。北越銀行の歩みや長岡の産業史を伝える資料が展示されます。

互尊文庫やNaDeC BASEだけでなく、各階には市民の皆様が利用できるスペースが配置されており、子どもから高齢者まで幅広い世代の方々が楽しんで利用できる施設です。また、7月14日には報道関係者向けの内覧会を予定しており、ぜひ取材していただければと考えています。

今後のスケジュールに関しては資料に記載されていますが、東館の整備も進めており、約2年半後に全館がオープンする予定です。その際には更なる機能の拡充を図り、市民の皆様にも価値ある施設を提供していきます。そして、長岡のイノベーションや起業・創業、産業振興、人材育成に大いに貢献していきたいと考えています。

(NTT東日本 徳山支店長)

NTT東日本は昨年6月7日に、「イノベーション都市長岡」というテーマで、長岡市と連携協定を結びました。この協定の肝となるのが、オープンなラボスペースをミライエ長岡に設置することでした。これまで東日本の中で札幌、旭川、仙台、東京蔵前と4つスマートイノベーションラボを開設してきており、今回、日本海側では初となる5つ目のラボを長岡に開設します。NTTグループは日本でも有数の研究所を持ち、情報通信のパイオニアとしての側面もあります。これを長岡市の米百俵の精神や技術、ものづくりのまちと結びつけ、イノベーション都市長岡を推進していくことを目指しています。

ミライエ長岡のスマートイノベーションラボには「NEST nagaoka」という名前をつけました。「NEST (巣)」という言葉は、長岡の未来と技術が生まれ育つ場所を意味しています。

このスペースは、単なる技術の研究だけでなく、創造と想像を育む場となることを目指しています。企業や学校、大学など、幅広い方々にこのオープンなスペースを活用いただくことを願っています。

(記者)

7月22日のオープンについて、市長の意気込みや市民へのアピールを改めてお願いします。

(市長)

再開発事業は何十年もの間、中心市街地の活性化において最も大きな課題であり、地権者の皆様頑張ってきた結果です。その中で、長岡市は「長岡版イノベーション」によってまちを発展させる政策をこの数年間取り組んできました。皆様にまずは互尊文庫を中心に楽しんでいただくことや、さまざまなイベントを通じて楽しんでいただくこと、そして子どもたちが新しい技術や時代のエッセンスを学ぶ場を提供することを目指しています。

また、イノベーションや起業・創業、産業振興の拠点として、産業界、4大学1高専の学生の皆様に交流を楽しんでいただきたいと思います。

(記者)

まちづくりの観点からお伺いします。フェニックス大手、アオーレ長岡、トモシアに続き、今回のミライエ長岡のオープンはどのような意味を持つとお考えですか。

(市長)

長岡市においても自動車社会の影響で商業施設が郊外へ移動し、中心市街地が疲弊してきたことが課題でしたが、長岡市は商業に頼るのではなく、まちなか型の公共サービスを通じて活性化を図ってきました。その一環としてアオーレ長岡などがあり、ミライエ長岡もその流れに位置します。しかし、この場所は公共的な機能だけによる活性化でなく、教育機関や産業界と一緒にイノベーションや産業振興をまちなかに根付かせて発展させていく拠点と考えています。それが結果的に新たなにぎわいをつくることに繋がると考えています。

(記者)

産業界や企業の方々をどのようにミライエ長岡に呼び込んでいく考えですか。

(市長)

従来の産業振興の方法は、主に商工会議所や商工会を中心に行われてきました。行政はその支援を行うことが多かったのですが、直接的に産業の創出や変革に関与することは少なかつたと思います。しかし、ミライエ長岡では、長岡市の商工部や商工会議所といった公的機関が一堂に会し、協働で産業振興やイノベーションを考え、実行していく場となります。このようなアプローチは日本全国でも稀であり、各界の合意のもとで運営される例は少ないと考えています。これが長岡版のイノベーション、産業振興のあり方になっていくといいと考えています。

(記者)

市民センターについて、今後どうしていくのかお考えがあれば教えてください。

(高見副市長)

市民センターにつきましては、坂之上地区の再開発が終わった後に、どういう形で再開発していくか土地を取得したURと協議しています。ミライエ長岡のような施設ができていく中で、民間の投資が生まれてくることを期待していますので、民間中心に老朽化したビルの建て替えも含めて次のまちづくりを協議しているところです。

【会見項目2：麴の香り漂う醸造・発酵のまち「摂田屋・宮内」の魅力向上！

連携キックオフセレモニー 開催】

(市長)

醸造・発酵のまち「摂田屋・宮内」の魅力向上として、秋山孝ポスター美術館長岡のリニューアルと、旧機那サフラン酒製造本舗の庭園のリニューアルについてお伝えします。

まず、秋山孝ポスター美術館長岡です。旧北越銀行宮内支店の建物で、秋山孝ポスター美術館を開館していましたが、昨年1月に秋山孝さんが逝去されました。その後、秋山さんの

意志を受け継ぎ、昨年 11 月に遺族から市へ美術館が寄贈されました。秋山孝さんがかつて北越銀行から譲り受け、自身のポスター美術館としていた場所を、長岡市にお譲りいただいたのです。長岡市は、隣接した撰田屋地区で醸造のまちづくりを進めており、そこと連携しながら、宮内・撰田屋が一体となった観光誘客や交流人口の増加、まちづくりを目指していきます。オープン記念式典や施設の詳細については資料に詳しく記載されていますが、リニューアルオープンに合わせて、令和元年から令和 3 年までの秋山さんの晩年のポスター作品とバードカービングを特別展示いたします。ぜひ、ご覧いただければと思います。

次に、撰田屋にある旧機那サフラン酒製造本舗の庭園についてです。ここは吉澤仁太郎さんが造園に関わりながら、魅力的な庭園を作り上げたところです。浅間山の溶岩を使った築山や、従来の庭園技法にとらわれない方法を取り入れた唯一無二の仁太郎ワールドとなっています。この庭園を令和 4 年度から 2 年かけて、長岡市が修復し、このたびオープンいたします。池の修復には、長岡技術科学大学や長岡高専の学生と協力し、ワークショップを行いながら完成しました。長岡市錦鯉養殖組合のご協力のもと、山古志の錦鯉を庭園池に放流したいと考えています。

こうした二つの取り組みにより、撰田屋地区や宮内地区など、地域全体の魅力が一段と向上したと考えています。多くの方々にお越しいただき、庭園や秋山さんのアート、美味しい食べ物など、この場所を楽しんでいただけることを期待しています。

(記者)

秋山孝ポスター美術館は、これまで私立だったものが市立になるということですか。

(市長)

はい。昨年 11 月に寄贈を受けて長岡市所有のものとなりました。

【会見項目 3 : ChatGPT 試行利用とその学び

AI 導入進行中！長岡市の「行政DX」】

(市長)

ChatGPT などの生成 AI の利用を 7 月から全庁に広げていきます。さまざまな課題が存在することを理解した上でガイドラインを策定し、個人情報を含む機密情報を適切に保護しながら全庁的な活用にも供していきたいということが会見の趣旨です。

5 月から一部の部署で試験的に生成 AI を使用し、その検証を進めてきました。先行利用の内容については資料に記載してあり、そこには感想や課題なども含まれています。こうした結果を踏まえながらガイドラインを策定しました。

私も ChatGPT を試してみましたが、地域特有の情報や私自身の個人情報などにはまだ対応が弱く、インターネット上にない情報については生成できないこともあります。一方で、

一般的な課題に対してはもっともらしい文章を生成することができ、自分で作るには時間がかかるものを、あっという間に提示してくれます。使い次第では有用であると感じています。文章のたたき台やデータ収集、整理、アイデア出しには十分使えると思っています。

ただし、生成される文章は事実性や真実性について厳密に検証されているわけではなく、選択的にフレーズを組み合わせているだけです。注意が必要です。これを下書きとして活用するか、その情報をもとに書き直すなど、使い方については習熟が必要であり、実際に業務の手助けになるかどうかをこれから検証していきたいと思っています。

7月から行政DX、業務効率化の一環として全庁で利用を拡大していきたいと思っています。特に安全性については注意が必要であり、ガイドラインを遵守しながら情報の漏洩や流出を防ぐために十分気を付けて使っていきます。また、事実性や真実性、正確性についても徹底的にチェックする体制で臨みたいと思っています。

この記者会見資料は、ChatGPTを使用して作成しました。内容をチェックした最終バージョンになりますが、どのようにして作成したかについて、作成担当者から、一つの利用例として説明します。

(行政DX推進課課長補佐)

ChatGPTを使用した資料作成の作業プロセスについて説明します。通常は職員が一から作成しますが、今回は私が概要をまとめ、それを基に新人職員がChatGPTでひな型を作成したという流れです。

詳しく説明しますと、まず私が既存の資料やホームページで公開している情報から概要をまとめました。それを新人職員が、プロンプトというChatGPTの指示文に落とし込み、ChatGPTを実行しました。1回の対話では適切な回答が得られないため、壁打ちという対話を何度か重ねながらひな型を作成しました。それを私が若干補正して記者会見資料を完成しました。時間的には、一から作ると半日程度かかった作業が、1時間程度に抑えられており、約8割の時間が削減できた印象です。

ChatGPTのプロンプトについては、特に指示事項と前提条件が重要で、背景や市役所職員の立場を明確にすることで、より私たちが求める資料を作ってくれます。初回にChatGPTで生成された文章から、よりインパクトのあるタイトルや理解しやすいサブタイトル、内容の充実をしてほしいなど指示することで、より精度の高い回答を作ってくれます。

使用して感じたのは、一般的な情報で文章が生成されており、我々の思いを表現するのは難しいということです。そこはChatGPTと対話を重ねるより、職員が直した方が早いと思いました。タイトルも6つの案をChatGPTに出してもらい、そこから組み合わせて使いました。ChatGPTの生成結果をそのまま使用するのではなく、それをベースに職員がより良い表現を考えることが重要だと考えています。

今後全庁的に利用していく中で、ChatGPTのプロンプトのテンプレートを共有することで、より業務の効率化を図れると思っています。

(記者)

明日から全庁的に展開される予定ですが、導入への思いや問題認識を含めて、市長の考えをお聞かせください。

(市長)

ChatGPT に効率的に命令ができるように習熟していけば効果は出ると思っています。慣れるまではプロンプトを書くよりも自分で文章を書いた方が早い場合もあると思いますが、実際に使いながらこの効果や効率性を評価していきたいと思っています。

行政の仕事は、定型的と思われるようなものを求められることがあります。例えば計画書づくりですが、計画書がなければ、補助金や支援を得られず、市民への説明もできません。こうした計画書の作成については、多くの市町村がコンサルタントに依頼してきましたが、それぞれの計画で違いがあまりない汎用的なものがあります。このようなところで生成 AI を利用することにもコストダウンや時間節約など行政の効率化に繋がるとと思っています。

ChatGPT は効率化の手段の一つとして使えると判断していますので、使い方を習熟しながら積極的に利用していきたいと思っています。

(記者)

ガイドラインで生成 AI に入力禁止されている長岡市情報セキュリティ対策基準の機密性 2 以上に該当する情報とは、具体的にどのような情報か教えていただけますか。

(DX 推進部長)

情報の機密性には 3 つのレベルがありますが、最も重要なものが個人情報など機密性 3 の情報です。機密性 2 に該当するものは、内部的な政策手続きの草案や提案、職員の個人情報、内部会議の議事録など、外部に公開すべきでない情報です。

(記者)

便利な反面、多くの個人情報を保有する市役所が、インターネットから情報を集める作業では、情報漏えいの不安を感じる市民もいると思います。セキュリティに関する市長の問題意識を伺います。

(市長)

生成 AI はインターネット経由で情報にアクセスして文章を生成する仕組みになっていますので、個人情報ははじめ外部に漏らしてはならない機密性 2 以上の情報は打ち込まないことを絶対のルールとして守っていきます。

(記者)

新しい政策を考えることに ChatGPT を使うことは、発表していない機密情報をインターネット上にあげることになるのではないのでしょうか。また、著作権の問題への対策について考えをお聞きます。

(DX 推進部長)

まず著作権の問題について、ガイドラインでは、著作権侵害のリスクがある場合、生成 AI の特性を理解した上で使用するよう定めています。生成 AI を使う上で非常に重要だと考えていることが、特性を理解した上で使うということと、セキュリティの 2 点です。全庁に利

用を広げるにあたり、これを理解した職員に使わせるようにしたいと思います。政策など計画途中の情報については、機密性1のオープンにできる情報のみを、生成AIに入れていきます。

また、セキュリティ対策として、ChatGPTの履歴と学習機能をオフにすることで、外部に情報が漏れないようにしていきます。

(記者)

ChatGPTを全庁に導入する場合の料金は、月額でどの程度を見込んでいますか。

(行政DX推進課長)

有料アカウントはドル建ての計算になっており、現在1アカウントあたり2,000数百円となっています。長岡市では10アカウントを有料で使用しており、業務の特性に応じて各部署にアカウントを割り振っていく予定です。それ以外の部署は当面、無料環境を利用していく考えです。

(記者)

これからの検証では、費用対効果など、どのように有効性を判断し、導入の根拠にしていこう考えですか。

(市長)

先ほども触れましたが、業務の作業時間が約80%削減されたという実感があります。時給換算することである程度コスト削減レベルがつかめると思っています。もし、職員が高い効率化を実感できるのであれば、1アカウント2,000円数百円でも十分な効果があると考えていますので、あまり厳密に評価することよりも、実際に使った職員の実感を収集しながら検証したいと思っています。

(記者)

誤って機密性2以上の情報は入力してしまった場合、メールの誤送信が発生した場合などと同様に、公表する事案に該当しますか。

(市長)

情報漏えいという観点ではChatGPTだから特別な問題ということはなく、実際に情報が流出した事案が発生した際には公表します。